

## 編 集 後 記

本稿を執筆している6月末時点、地球の反対側南アフリカ共和国でサッカーの世界カップが行われている。アジア代表の日本侍ブルーチームは戦前の予想以上の戦いで予選リーグ戦を戦いぬき、ベスト16、決勝トーナメントにコマを進めた。結果を大いに期待したい。試合中継はもちろん、各チームの選手やコーチそしてサポーターの情報がリアルタイムで日夜テレビに放送されている。実に情報通信の進歩には今更ながら驚かされる。

リアルタイムといえれば本学会誌のオンライン投稿が今年1月末から開始され、編集会議も各自の机上モニター画面を眺めながら行われている。欧米の主要ジャーナルは投稿・査読ともオンラインシステムですで行われているが、わが国にあって発達・普及したとはいえ、どの程度のものか。そこで、さしあたりオンライン投稿開始で本誌の投稿論文数に変化がないかを調べてみた。①オンラインシステム開始からの5か月間、②昨年の同時期、③直前の5か月で、結果は①182編、②236編、③165編であり、昨年と比較すれば少ないもののオンライン直前よりは増えており、この結果には一安心である。

一方、モニター上の査読は、私自身はまだ不慣れで、結局は紙運用時代と同様にプリントアウトしている場合もあった。しかし外来での電子カルテ画面と同様、編集会議では画面を見る時間が次第に長くなった。これには一長一短があるかも知れないが、査読者、投稿者の情報交換がリアルタイムに行われることによる時間の節約効果の絶大なことは明白だ。

今後オンライン投稿、ウェブ審査が一層効率よく機能することで、本学会誌が目指す最高品質の邦文ジャーナルを引き続き期したいものだ。また何より、このジャーナルを支える質の高い論文作成へ向けて投稿者はもとより、そのレフリーとして、時にはサポーターとしての編集委員・査読委員の熱意が継続されることを願いたい。

(田中淳一)